詩的に表象される、これが、宗教の唯一の真理である。ところが、宗教はしばしば象徴であることを忘れ、文字通りの真理や情報、道徳的権威などをほしのままにしようとする。これに対して詩的な表現は、ただ存在と想像力の自由な領域に身を委ねる。つまり、宗教は生に対して、究極的には詩と同じ価値を有するにもかかわらず、知識や経験にとらわれやすいものであるために詩よりも劣るのだ。宗教のこのような両義性に対する価値判断には、暗にカトリックを美的感覚に正直な庶民の宗教として肯定的に描き、反対にプロテスタントを美的要素が削ぎ落とされた知的な宗教として多分に否定的に述べるという彼自身の美的嗜好が、顔を覗かせている。

一九二五年出版のジョン・デューイの著作『経験と自然』に対する書評において、サンタヤーナは、デューイの言う自然主義が不徹底であることを自然における「前景の支配」という語で解き明かす。デューイの自然主義は人間の「経験」という「前景」すなわち特定のパースペクティヴに立つというドグマティズムを内包しており、これは自然主義ではなくヒューマニズムでしかない。しかし、サンタヤーナは、デューイの自然主義を偶像崇拜（人間崇拜）と行って破壊するのではなく、むしろそれに象徴的な意味を読み込んでしまおうとする。例えば、デューイの自然主義はアメリカの生活文化が要求し生み出した象徴だというように。サンタヤーナの書評に対するデューイの応答は、サンタヤーナの自然主義の方こそ中心となる支柱がないということに尽きる。デューイは、自分が人間的生の自然的基礎をないがしろにするようなヒューマニズム（人間中心主

義）には与しない自然主義者であることを繰り返して表明する。しかし、自らドグマティックな自然主義者を名乗りながら、空想の世界に対する憧憬を隠しきれなかったサンタヤーナは、デューイと同じく「ドグマティズム」に陥ることを如何にして回避しようとしたのか。

結局、宗教は詩の自由さに及ばない。宗教は詩になることはできない。それでもなお、サンタヤーナは、宗教と詩が一致するような空想的世界を好んだ。詩的空想の世界への憧憬が叫ばれるその反面、自然に囚われた宗教や動物的人間に対する愛着や愛おしさも捨てきれない、このような二元論的一元論が彼の自然主義的宗教論の底に響きわたっている。

《概念枠》としての宗教理解を巡って

飯田篤司

現代哲学における「言語」の前景化に伴い、「概念枠」として特徴づけられよう一群の宗教観が語られてきた。世界経験を必然的に媒介する言語が形成する排他的な概念枠と、それに相対的な真理というモチーフは、諸文化伝統の自律的な価値を語ることを可能としてきた。さらに日常言語使用や科学には回収されない独自の宗教的真理や意味を語る「宗教言語」という理念も語られてきた。しかし、この言語的境界はまた、根本的な概念的相違によって他者との対話さえも困難となる概念相対主

第1部会

義をも帰結することとなる。

それに対してD・デイヴィッドソンは「経験主義の第三のドグマ」として「概念枠組み」という観念自体を批判する。真の定義不可能な先行性から出発するその戦略は、意味を真理条件によつて規定することで、言語理解からイデア的な意味やそれを内在化する言語能力主体などを排除する。そして根本的解釈の分析を通じて、言語の翻訳可能性ゆえに、解釈不能な「根本的に異質な概念枠」なるものに懐疑を向ける。むしろ「相手をたいていにおいて真」とみなす「寛容」こそが理解の要件であるとされ、そしてこうした根本的解釈状況こそが言語コミュニケーションの通常の様態であるとする。

こうした批判を前提とする時、概念枠的な宗教理解にも再考が促されよう。ただし、それは無条件な重なり合いを意味するものでなく、「たいていの信念の重なり合い」から超出する不一致、特に「理論」に関する不一致の可能性も指摘されている。それを受けてテリー・ゴッドラフは、宗教を理論的に据えつつ、日常・具体的なリアリティとの本質的な連動性の下に宗教を描いていく。そして本質的に理論的な宗教は観察的変化から相対的に独立であるがゆえに、「寛容」の必然性が弱まり、宗教的信念の不一致が可能になると論じる。論理的には無形式な経験や世界を組織化する可能性を認めつつも、それはすでに概ね合意が得られている日常性の審級の前に晒されており、「概念枠」として想定しうるような認識的優先性を宗教的信念はもちえない。ただし宗教的信念は日常性のリアリティの上に立ちながらも、「解釈的な優先性」により、日常の「評価」を

果たしていくとする。

さらに、「排他的な輪郭を有し、独自の真理要求をなす」といった宗教像に対しても再考が迫られよう。本質的に介入する解釈という契機への視線は、言語コミュニケーションの必然的な開放性・流動性を帰結する。この時、固定閉鎖的で排他的な言説領域という理念は内側から溶解していく。特定の語の使用により、内的に同一な意味領域を形成するものとして宗教（諸宗教）もまた、この時その輪郭を曖昧なものとなせざるをえない。

こうして概念枠としての宗教理解から離れる時、すべての言語コミュニケーションが原理的に文体的には多言語使用とも位置付けうるのと同様、原理的に流動的で多元的な言説の総体としての宗教像を語ることも可能となる。この時同時に、「枠」を超えた意義も語ることが可能となろう。例えばデイヴィッドソンはメタファーの効果を言葉の意味とは異なる次元に求めるが、その創造的契機を宗教に認める時、従来の「宗教的真理」という理念と引き換えに、全体論的な信念網全体へと広がりうる可能性を手に入れることとなる。

原理的に相互理解を阻む障壁を排したユートピア的展望は、しかし、現実には隔たりを前にする時、無条件に共感されるかは自明ではない。実際、デイヴィッドソンにおけるホーリズム網の中の収斂というプランに対しては理論的な批判もなされている。確かに理論と具体、理論と理論との相対的自律性は、諸宗教間、宗教と日常との間に亀裂を残し、より分裂的な宗教像を描くことも可能であろう。ただその時にも「だいた

いにおける重なり合い」を希求する権利は原理的に残され、その実現には「寛容」が要件となろう。

科学と宗教とが扱う領域の相異について

沖 永 宜 司

科学と宗教とは、同じ領域の事柄について、両者ともがそれぞれ異なった見解を表明することによって対立する。それに対して、科学と宗教とは扱われる事柄の領域が異なり、したがって両者の対立が原理的には不成立である、という考えをここでは取り上げたい。

その第一には、科学の領域を現象世界の領域、宗教の領域を形而上学の領域として、それらの領域区別を考える立場がある。この宗教の領域の問いには、「世界がなぜあるか」などにも見られるように、テスト不可能という共通した性質がある。さらにこの領域は、科学的知識が拡大した場合でも、必ず科学の説明をメタな位置から説明しなおすことができることを特徴とする。たとえば厳格な生物学上の自然選択論者が同時に敬虔な信者であり得る理由はこれであり、それは宗教において、神的な力や原因の観念を確保させる試みの中で用いられてきた構造でもある。それは、世界全体に関する信念の根拠は世界の中に見出せないという、テスト不可能領域が永久に存続する構造をも示している。

第二は、自然的事実とそれを容れる規範やコンテクストとは不可分であり、両者ともを実在と見なす立場である。この立場は、自然は無意味で無価値であり、意味や価値とは事実に対して主観的に付与される非実在に過ぎないという考えをも、主観的価値評価のひとつとして見なす。もし徹底的に事実のみが実在であれば、「価値がない」という価値判断さえも意味を持たないからである。つまり、自然の事実だけでは自然からの価値剥奪さえできないはずだが、この剥奪を行っていることがまさに、事実と価値判断との不可分性を示している。そしてこの判断は科学ではなく、科学を形作る生の営為であり、その生とは科学的事実には不可欠であることによって、実在性を確保する。こう考えると逆に、純粹な自然とは、自然「主義」的世界でも、宗教的理念が描く世界でもないことになる。

第三に、宗教の領域を形而上学的な真理が定立する以前に見る立場が考えられる。この領域は、世界の根源に関する言説さえをも成立させている場所を形成する。これは科学の言説に宗教の言説を対置させるのではなく、両者の対立構造そのものを切り崩してゆくことである。それは機械的自然の無意味に対して、目的的な有意味を対置する立場でさえない、根源的な生の立場である。反対に形而上学的な言説によって世界に意味付与しようとする態度の方が、特定のプラグマティックな目的のために、生から抽象された意味連関に組み込まれている。したがって生への帰趨としての形而上学的言説の切り崩しは、言説以前に位置し、存在者とはならない。したがって、それは前二者のように究極的な知としてさえ、設定できない。むしろ形而上